

黄金の郷

# こしえるびと

つむぐストーリー vol.133

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”のメッセージをシリーズで紹介していく。

## よりおいしい米作りを目指して

一関市舞川 千田 康博さん

### 壁を乗り越えて

春の訪れを予感させる晴天の下、千田康博さんはトラクターのメンテナンスに余念がない。

2015年の取材から11年。結婚や栽培品目の変更、自身の農園「千田農園」の設立など、さまざまな変化があった。一方で、「就農当初はただただ楽しかったが、経験を重ねていくうちに、目の前のやるべきことをこなすだけになっていた」と明かす。そんな中、コロナ禍の影響で米の売り上げが下がったり、大雪でビニールハウスが倒壊したりと、想定外の事態に見舞われた。壁に阻まれるたびに「もうやめようか」と諦めそうになったが、「農業が好き」という気持ち思い出してここまで踏ん張ってきた。

### 良質米を作るために

康博さんは22年、自身の農地に「千田農園」と銘打った。屋号を持つことで士気を高め、生産活動へのモチベーションを上げるためだ。以来、栽培管理に一層力が入るようになった。さらに、のぼりを作って舞川地区内に立てたり、SNSやECサイトを開設したりとPR活動にも挑戦している。アピールのかがいがあったか、注目してもらえることが増えてきたと感じている。

23年にはJ Aブランド米部会へ加入した。部会員同士で交流しながら、米生産の知見を深めている。同年、千田農園はAS I A G A Pの維持審査を受け、部会は団体認証を取得。「自分の米作りに対する姿勢が認められてうれし」と笑みをこぼす。

### 応援を受けてさらなる高みへ

ひたむきに米作りに励む康博さんには、「銀河のしずく」頂上コンテストで第1位を射止めるという大きな目標がある。過去2回入賞を果たしたものの、第1位を狙っていただけに悔しさが残り「次こそは勝ちたい」と意気込む。

康博さんは以前、「就農以来培ってきたものは、仲間という存在」と語ったが、それは今も変わらない。J A青年部や地元消防団の他、新たに加入したいもののせき米クラブなど、たくさんの人々と手を取り合ってきた。また一家の大黒柱でもあり、家族からの「お父さんのごはんおいしいよ」という声は何よりの励みになっている。たくさんの方の応援を背中にかけて、今年も康博さんの米作りが始まる。



## PROFILE

**千田 康博**さん (40)  
Yasuhiro Chida  
一関市舞川

1985年一関市舞川生まれ。一関工業高校卒。一関市内のメーカー勤務を経て2010年に就農し、翌年に一関市の認定農業者になる。22年千田農園設立。水稲7畝。妻、子、母、祖母との5人暮らし。



2015年に康博さんを取材した「こしえるびと」はこちらから

